

大地

第 30 号
2009.1.1. 発行
浄 國 寺
上越市町3丁目14-10
☎025-523-5724

こころおちつけば

山崎隆昌

明けましておめでとうございます。
皆様にはご健勝のうちに新しい年をお迎え
のことと思います。

俳人種田山頭火は、一生を放浪と乞食に明
け暮れ句を詠み続けた人です。あるときは神
社のやしるに野宿し、あるときは木賃宿に食
と床を得て過ごしたといわれます。

明治十五年（一八八二）に山口県に生まれ
昭和十五年（一九四〇）に自らの草庵で静か
に息を引き取るまでの五十八年の生涯でした。
現代は、全国各地を新幹線が走り、道には
自動車が増え、より速いことを是とする時代
で、法衣に身を包み、わらじを履き、大自然
の中を歩き続けることなど無理な話です。
山頭火に「庵中独坐」と付けられた次の句
があります。

こころおちつけば水の音

心が落ち着く、心がある時、聴こえ
るものが聴こえ、見えるものが見えてくる。

心を感じそれが響いてくるというのです。
私たちは、本来大きな自然の中で命を育く
んできました。特に農耕を土台とした日本人
の生活は、いつも自然とともにあり「お天道
さま」「お山さま」と自然に対し常に畏敬の
念を抱いておりました。

しかしスピードや便利さに走り、大きなこ
とを「勝ち組」とする今の時代では、心を落
ち着けて自然に接する機会は極端に少なくな
り、路傍に咲く野花も見えない、鳥のさえず
りも聴こえない、小川のせせらぎ、田圃の早
苗、月や星の光も遠いものになったのです。
そのうちに自然の姿はテレビの映像やパソコ
ンの画像でしか観れなくなるのではないかと
危惧するのは余計な心配でしょうか。

私たちの日常生活と自然との距離が離れた
ことが、人々の生活から特に人々の心の中か
ら、やわらぎや潤いをスポイルし、心の乾燥
化を進めているのではないかと思うのです。
そして生活の便利さと引き換えに地球全体
の規模で絶望的な自然破壊が進んでいます。
公害と呼ばれるものもありますが、自然破壊
をしているのは、誰でもない私です。わずか
徒歩五分の店へでかける場合にさえ自動車を
当たり前のように使う。家の中を見れば様々
な電化製品に溢れ、その便利さにどっぷりと
浸っている私です。

今や、私たちは自らの生活の中に自然を感
じ自然と触れることを意識的に取り入れなけ
ればならない時代なのでしょう。
山頭火の『山行水行』は自然を讃えた素敵
な詩です。

山あれば山を観る

雨の日は雨を聴く

春夏秋冬

あしたもよろし

ゆうべもよろし

山も、朝も夕べも、全てよろしです。

最近では、地震、集中豪雨など異常気象が多発
しています。このことを含め自然を大切にし
なければなりません。

厳しい社会状況が続きますが、本年もよろ
しく願います。

俳句五句

山崎 睦

湯気の鍋老いの笑顔や年忘れ

風邪に寝て多くいたただくおかげさま

冬苺ワイングラスに盛ってみる

老斑も生きし証や枇杷の花

死ぬ不思議生くる不思議や去年今年

父の死

岩木 長谷川 昌

父は去る十月二十二日、百二歳四カ月で生涯を閉じました。

父は若いときからいたって健康であり、病氣らしい病気をしたことはありませんでした。三年前に九十三歳で亡くなった母は病いと闘いつづけた一生でしたので、正に対照的でした。

そんな父が八年ほど前に、なぜか急に足が動かなくなつて、全くの寝たきりになつてしまひ、以来ベットの上下での生活を余儀なくされました。介護関係の施設への入所も考えましたが、私の家内は「わたしができる間はわたしが家で世話をする」と言つてくれましたので、デイ・サービスとショートステイを組み入れながら在宅介護主体で八年間を通しました。

寝たきりになつた状態でも父は体の健康は保つており、食欲も旺盛で私どもよりむしろ多い食事をとつておりました。しかしながら、今年（二十年）の春ごろからは、さすがになんとなく元気がなくなつてきたのかな、食欲も若干少なくなつてきたのかな、と思えるフシも見えるようになりました。それでも主治医の先生からは「血圧をはじめどの数値にも異常はありません。この年齢でこんな例はあ

まりありません。まだまだ大丈夫です」と太鼓判を押していただいております。

亡くなった二十二日もデイ・サービスでお世話になつて帰つて来て、いつもと変わった様子は見られませんでしたけれども、夜の十時を過ぎたころ、これは我が家の毎日の日課のようになつていたことですが、家内と二人の娘は寝る前には必ず「おじいちゃん、おじいちゃん」と声をかけることにしておりました。この日はなぜかいつもより早い時間に、それも三人そろつてベットの脇でそれぞれに話かけておりましたところ、途中で反応が変つたらしく、娘たちが「おじいちゃんの様子が変わりました私も、急いで枕元にまいりますと、四人揃うのを待つていたかのように、それこそ「スウー」という感じで息を引き取りました。人間死を迎えるとき本人の体の中では、どんな苦しみがあるのか想像もできませんが、見る限りでは眠るがごとくとはこういうことなのだなどという感じておりました。

それからしばらくの時間、我が家はちょっとしたパニックでありましたが、考えてみますと、時には大きな声を出して怒ることもありました。本来おだやかな性格であった父が、性格そのままに、おだやかに静かに逝つたといえると思いません。そして何よりも、自宅で家族四人全員に見守られての最後を迎え

るといふ、このうえない幸せな大往生であつたといえるのではないかと思っております。

忌明けの法要も終つて、あちらの世界で父を迎えた母とどんな会話をしているのでしょうか。母は自分も軽い脳梗塞を病んで、体が不自由であるにもかかわらず、寝たきりの父を見ながら「お母さんにそんなに迷惑をかけられない。わたしの方が一日でも長生きして、じいちゃんの世話でお母さんを助けたい」と口癖のように言つていましたので、父と会つて開口一番「何でこんなに長く、お母さんやみんなに迷惑をかけていたんだね、もっと早く来ればいいのに」と憎まれ口を。対して父は「そんなこというもんでない。こればかりは自分でどうすることもできないんだ」と応じるなど、あいかわらずの言い争いをしていゝるのではないかと思います。

口では争つても、七十年間連れ添つた夫婦です。この世でそうであつたようにお互いの欠点をカバーしあいながら、あの世でも仲よくやつてもらいたいものと思つております。

※逝去された長谷川様はお兄様も長命で、六年前に九十八歳で還浄されました。

ご兄弟で同じ卸問屋に長年ご奉公（勤務という表現はなじまない）。お二人とも穏やかながらも厳しい姿勢をお持ちでした。

創作(コント)

にぎりぼくろ

春日山町 金子和子

手のひらの中にあるほくろを、にぎりぼくろという。金運を表すほくろということ、珍重されている。

正子の夫の進は、この珍しいほくろの持ち主である。ちょうど朝顔の種を横に半分にしたような形で、右の手のひらのくぼみ中にくぼんと納まっている。

二十年前、正子は労組の集まりで、進と知り合い、一年ほど交際して結婚を申し込まれた。その時手のひらを開いてほくろを示し、「ぼくには、金運があるから経済的には安心していいよ」

と言った。その言葉に惑わされたわけでもないが、正子はなんとなく、豊かな家庭を夢みて結婚したのである。

長男の嫁として、病弱なしゅうとめに代わって、義弟と義妹を結婚させ、晃と修の二人の男の子を育てた。しゅうとめを見送り、子供にも手がかからなくなったので、近くのスーパーに出て十年になる。

いさかいは、晃の大学の入学式に正子も、一緒に行きたいと言ったことから始まった。進は、だめだという。

「女が外に出ると余計な金を使う」

それだけの理由である。

晃や修の入学式、卒業式には進が勤務をやりにくりして出席していた。

「女は、やれ、着物だ、やれ、パーマだといつては金を使う。男は背広一つですむ」

正子は町内の旅行にも、クラス会にも出たことがない。年一回のスーパーの旅行は費用が会社持ちなので、参加がゆるされる。

でも今度の上京だけは許してほしかった。ほとんど外に出ることなく家を守り、夫のいうとおりに儉約に心がけてきたのだから、かなりまとまった貯蓄もあるはずだ。金の出し入れはすべて進がやっているので、正子の給料袋も封を切らずに差し出す。最低の生活費を渡されて、それをやりくりして暮らすので正子は自分のお金というものを全く持ったことがなかった。

三年前、晃が高校入学と同時に、志願大学を東京にしぼって、受験にそなえていたので、正子は絶対に合格すると信じて、上京に夢を託していた。

閉ざされた世界を一度飛び出してみたい。テレビでしか見たことがない東京。晃の大学。晃のアパートで身の回りを、整えてやりたい。ああであろうか、こうであろうかと空想している時は楽しかった。それがどうしても許されない。そして、いつもお金のことで夫婦げんかになると、進は右手のにぎりこぶしをにゅ

うーと突き出す。これで結論はついてしまうのである。

「おれは、にぎった金は絶対放さないぞ」にぎりぼくろの、ほんとうの意味はこれであつたのだ。

正子は三年前から、会社の経理課にたのんで、時間給の上だった時に給与明細書の方の金額を少なく記入してもらって夫にさし出し差額を貯金しておいた。その差額が、三万円近くになっている。上京する時のこづかいとしては、まずまずかと思う。晃の時はだめでも、二男の修の時にまた頼んでみよう。その時は十万円くらいにはなっているかな。

その時ふと、正子の脳裏によぎったのは、はたして三年後、夫が上京を許しても、このお金を使う勇気があるかな、ということである。正子は自分の手のひらにも、にぎりぼくろがあるような幻覚に、思わず激しく手を振り切った。まるで手についた見えないにぎりぼくろを振り落とすように。

※金子様は行動の人、文学に限らず様々なことに意欲的に活躍されています。

誰もが自らの中に「にぎりぼくろ」をもっているでしょう。

思わず我が手のひらを見てしまつ。

あいつ

山崎慎子

子ども達の下校時刻に久しぶりに家の前の通りに出た。この通りは主に校区の中学生の通う道になっている。

ちょうど中学二年生位の男子生徒が五、六人楽しげに語り合い、笑いながら近づいて来た。一瞬ためらいながら彼等の方に顔を向け「お帰りなさい」と声をかけた。

ほんのひと息会話が止まり、次の瞬間「ただいま！」と声があとんで来た。

少し照れたのだろう、行き過ぎてからその中の一人がおどけたように「おぼちゃんただいまー」と言って立ち去っていった。ただそれだけの出来事である。そしてそれだけのことが嬉しい。あとの半日、私はずーと胸の中に温かいものを抱きながら過ごすことができた。

昨年、隣組の当番がまわって来て登校時の見守りに立った時も、この中学校の生徒の多くは、自分の方から「お早うございます」と声をかけてくれた。

ごく自然に声を出す子、一所懸命心の中で「せーの」を言ってから声を出す子、ついに言い出せぬまま通り過ぎる子と様々であったが、こちらから声を掛ければ、高校生でもた

いては返してくれることを知った。

ところで数少ないけれど、私にも数回の登山経験がある。苦しくて、もう山なんか登るものかと思ったその思いだけは残っていても、苦しさそのものはきれいにわすれている。

そのわずかな登山の忘れ難い思い出は、母の握ってくれた味噌おにぎりのこの上ない旨さと、登る人と下る人が細い道のすれちがいざまに交わすあいさつである。その時々「ご苦労さん」「お早うございます」「こんにちわ」と様々に変化するのだが、全く見ず知らずの人間同士が、山の上では、ごく自然にあいさつを交わす。そしてその声に励まされてもう少し頑張ろうという気になるのである。

ところが地上に下りてそんなことをする人はだれもない。

もっとも、街の中で見知らぬ人に突然あいさつをしたなら変人扱いされるか、単なる人違いをしたと思われるのがせいぜいだろう。せめて、家庭の中で、ご近所の間で、地域の中で、あいつの輪が広がったなら、世の中少しは住み易くなるのではないだろうか。

悲しい時は

風と共に 走れ

嬉しい時は

花と共に 舞え

坂村真民



至福の時間

三和区 沖柳 中里雅之

高田駅前「はらみ寿し」というすし屋がある。駅前が整備され近代化されたが、古びた今にも倒壊しそうな建物である(失礼)。

そこを覗くと八十歳を優に越えた老すし職人が、顔のしわをいっぱいにして迎えてくれる。昨年の冬に行ったときに、今日掘ってきただという独活の芽を薄く切って出してくれた。さらに落の味噌汁を出してくれたりして一足も二足も早い春を感じさせてくれた。

なんとと言っても絶品はしめ鯖である。きれいに洗った笹の葉に載せて出してくれる。しめ具合が最高であり、口の中に入れるとそのふくよかさが堪らない。

熱燗が最高の季節であり、カウンター越しの主人とぼつぼつ語りながら、ゆっくり時間を過ごしたいものである。

後記

寺報「大地」三十号をお届けします
今号は、長谷川様、金子様から寄稿をいただきました。ありがとうございました。
そして大切な友である中里氏からも。皆様のご寄稿をお待ちしております(隆)